私たちに しときなさい！

イケダ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
私たちに　しときなさい！

【Ｎコード】
Ｎ７９７６Ｘ

【作者名】
イケダ

【あらすじ】
銀杏高校二年の原田柊兵は眼光鋭くいつも仏頂面。入学早々に乱闘騒ぎを起こした事もあり、学内でも密かに恐れられている存在だ。だが小学校時代の幼馴染、風間美月と森口怜亜が同じ高校に転入してきたことで柊兵の運命が少しずつ変わっていく。
二人の美少女から熱烈な想いを寄せられる柊兵が最後に選ぶのは、活発な美月、おとなしい怜亜、どちらなのかの物語……の予定。自サイトより転載中。

登場人物一覧

≪銀杏高校の生徒≫

★原田（はらだ）　柊兵（しゅうへい）

主人公。私立銀杏高校の二年生。眼光鋭く、不機嫌時には喧嘩っ早くなる性質。

☆風間（かざま）　美月（みつき）

柊兵や英範、怜亜の幼馴染。とても活発、運動神経もいい。柊兵のことが好き。

☆森口（もりぐち）　怜亜（れあ）

柊兵や英範、美月の幼馴染。少々控えめな性格で料理が得意。柊兵のことが好き。

★楠瀬（くすのせ）　慎壱（しんいち）

柊兵のクラスメイト。スマートな優男。女性の守備範囲は五人中、一番狭い。

★真田（さなだ）　尚人（なおと）

柊兵のクラスメイト。要領が良く、世渡りが上手い。年上&眼鏡女性が好き。

★佐久間（さくま）　英範（ひでのり）

柊兵のクラスメイトで幼馴染でもある。家は空手道場を経営。グループ中、一番の常識人。

★難波（なんば）　将矢（しょうや）

柊兵のクラスメイト。単純な性格のお調子者。実家は蕎麦屋。女性の守備範囲は一番広い。

≪その他≫

☆ミミ・影浦（かげうら）

西洋占星術師。朝の情報番組で放映される占いコーナー、【ミミ・影浦の愛の十二宮】の占い師でもある。柊兵の苦手人物の一人。

プロローグ　―　ここから受難は始まった　―　＜1＞

――　斜に構えた仏頂面。
――　眉間にくっきりと刻まれた二本の深い立て皺。

……はっきり言おう。今日も俺は機嫌が悪い。
仲間内から最近益々キツくなってきているぞ、とはやし立てられている目つきは確かに一段と鋭さが増しているような気がする。それは不承不承ながら認める。
俺の不機嫌の原因はただ一つ。
それはここ数日欠かさず見るようになってしまった朝の情報番組、『　モーニング・スクランブル　』中に放映される、【　ミミ・影浦（うらかげ）の愛の十二宮図（ホロスコープ）】　。こいつが俺の心の平静をいつも乱しやがる元凶だ。

……とはいっても星占いに興味があるわけではない。むしろ占いの類は昔から蛇蝎の如く嫌っている。
“　自称　”　も含めればそれこそ途方も無い数が存在すると思われる未来の預言者たち。
奴さん達は明日やほんの一週間先の近未来から、迷う魂が天に還るまでに辿るであろう遠い未来までを、さも親身になっているような物言いで悩める子羊達に占いという形で予言する。
しかし俺はその予言を信じない。
「惑う子羊達の足取りがもう乱れないように」という大義名分の下、占星術師たちはカードや水晶、天眼鏡等の、それぞれが得意とする様々な手段を使用し、未来を見透かす千里眼を駆使してよりよく確実な人生を送る為の助言とやらを一段上の場所からご大層に指南してきやがる。

俺から見りゃあそんなことは余計な世話だと頭のてっぺんから怒鳴りつけてやりたい傍迷惑な助言の数々も、悩める者にとっては遥か先まで煌々と照らし出す、“　希望　”　という名の灯のついた魔法の特大カンテラに見えるらしい。まったくもってアホらしい。

占い師達が言葉巧みに紡ぎ出す予言の数々は確かにもっともらしい響きに聞こえる。

が、考えようによっては何通りかに解釈することの出来てしまうあんなあやふやな言い草を、どうして世間の奴らは簡単に信じ、そしてまたそれを己の未来の糧にしようとすることが出来るのか、まったくもって不思議でならない。

だがいくらそう苦々しく思っていても、こちらにはそれに科学的に反論するだけの確たる物証が無いのが業腹だ。冗談抜きでタイムマシンでもどっかの科学者が実用化してくれればそれで自分の未来を見に行き、「おい違うじゃねぇか！」と胸倉掴んで怒鳴りつけてやることもできるんだがな。

しかし敵も去るもので（いつの間にか敵扱いだが）、

『限られたデータのみの科学的根拠だけに思考を縛られ、この殺伐とした時代を孤独に生きていくのでしょうか？　一を三で割ることは永久に出来ませんが、一つのお煎餅を人の手で三つに分けることはできるのですよ』

とすかさず反撃してくる。よく分からねぇが何か頷けるものがその中には確かに存在して、思わず納得してしまいそうになる。

ま、量りで正確に計測すれば手で割ったその煎餅も完全な三等分ではないだろう。

でも確かに三つに分けることは出来、三人の人間に煎餅を与えてやることは出来るもんな。

……ってなんだよ、もしかして俺も結構暗示にかかりやすい型（タイプ）な

のか？

――　人は悩みを抱えると何かすがるものが欲しくなる。それはよく分かる。

そしてそれがヘビーな悩みなら悩みであるほど、尚更占いという物に傾倒し、そこに束の間の安寧を求めて疲弊した心を委ねたくなる気持ちも分かるような気がする。

だがそれがあまりにも不確かな予言（そんなもん）で本当にいいのかよ、と天邪鬼な俺は思うわけだ。

と、俺がいくらこんなにひねくれた考えを持っていても、実際の所「占い」というジャンルはこの荒んだ世の中に、どんな強風でも決して揺らぐ事などのない大木の根っこのようにしっかりと定着、繁栄していやがるし、もちろん需要もある。

年末になれば書店には『来年のなんちゃら星人の未来・丸分かり！』なんていう本がうず高く平積みにされ、それなりにバカスカと売れていくのを目の当たりにする光景はもうお馴染みだ。結局はあちらさんの大勝なんだよな。

だがそんな預言者達の中で、時折図々しくテレビに登場してくる功名心に取り憑かれた占い師達の一部は、オリンピックで日本が取れる金メダルの数など、逃げ道の無い予言をズバリと言い切ることがある。

しかしこの場合も、もし外れたとしてもなんら問題は無い。予言が外れても奴さん達はそれが間違いだったとは決して認めないからだ。

てめぇの予言が外れたのに臆面も無く、「占いは水物なんですから」と堂々とテレビで言い放った占い師を見た時は当時心底呆れたものだ。

……少々、暴言が過ぎただろうか。さて、ここからが本題だ。
これだけ占いの類を馬鹿にしまくっているこの俺が、何故『ミミ・影浦の愛の十二宮図』を毎朝欠かさずチェックし、しかもその結果に密かに一喜一憂しているのか？
理由は至極単純明快。

――　それが異様に当たっちまっているせいだ……。

「事実は小説より奇なり」とはよく言ったもんだと苦々しく思う。
原田柊兵（はらだしゅうへい）、ここで華麗に敗北宣言だ……。

プロローグ　―　ここから受難は始まった　―　＜2＞

つい最近まで、俺にとって朝の情報番組はただの雑音に過ぎなかった。

毎朝の慌しい一時の中で時刻確認を兼ね、家族の誰かがかならずつける居間のテレビ。そいつが延々と垂れ流し続ける情報を右から左に流す。

【モーニング・スクランブル】には専属マスコット的なスタンスの奴がいやがって、珍妙な形の目覚まし時計“モニン君”とやらが五分置きに教えてくれる現在の時刻、それだけを無意識にその雑音の中から器用に聞き分けて拾い出す。

朝から生真面目なニュースに耳を傾ける気もねぇし、広げたスポーツ新聞を横目に飯を食うからスポーツニュースも必要ない。ましてや芸能人で誰と誰が付き合っているだとかなどのゴシップネタには毛ほどの興味も無い。

「今月オススメのヒット漫画はこれです！」

などと自分に興味のある話題が偶然耳に飛び込んできた時だけ、箸を片手に身体を大きく後ろに捻る、そんな毎朝だった。

だから『愛の十二宮図（ホロスコープ）』なんていう、いかにも女子供のみが喜びそうな下らない星占いなんざ、まさに雑音中の雑音、一言たりと聞きたくない、……はずだったのに、今の俺は毎朝この五分間のコーナーを軽い動揺を抱えながらヘビーチェックしている。

九月十四日、月曜日。午前七時四十八分。

『ミミ・影浦の愛の十二宮図』が始まった。いよいよだ。

大きく後ろを振り返り、箸を止め、固唾を呑んで本日の自分の運勢を見る。

俺は十月十九日生まれなので該当星座は天秤座になるらしい。牡羊座から始まって七つ目、本日の天秤座の恋愛運命の発表がきた。

「さぁっ、占うよ～ん！」

と叫びながら毎回画面中央に飛び出てくる、この全然可愛くねぇ間延びしたおたふく顔の着ぐるみ天使だけは本気で勘弁してくれ。こいつを見る度に精神不快指数が軽く五倍に跳ね上がる。

この占いはその日の内容によって発表前にＢＧＭが変わる。いい占い内容の時はポップ調、悪い内容の時はベートーベンの運命の曲が流れる。

……来た。

「さぁっ、次は天秤座だよ～ん！」

のアニメ声と共に聞こえてきたのは軽快なポップ調のメロディだった。

「にゅふふ～♪　とってもいいことがあるかもよ～ん！

異性があなたに急接近！　仲間の協力でさらに新しい展開が！？

流れに身を委ねれば、今日は一日超ハッピーディ！　やったね♪」

……何が「にゅふふ」だ、何が「やったね」だ。

やたらと感嘆符が出まくりだった今朝の天秤座の占いを見た俺の機嫌はここで一気に悪くなる。

不細工なおたふく天使が先端に星のついた長ステッキを振り回し、「やったね♪　やったね♪」とドスドス足音を立てながらスタジオ内を所狭しと走り回っている。今すぐ飛び掛って本気でこいつの首を絞めたい。

しかめっ面で茶碗の残りをかきこむと乱暴に席を立つ。

今の予言は「超ハッピー！」どころか、俺にとっては「今日も大変なことが起きます」と公共の電波で宣言されたようなものだ。

浮かない顔で洗面所に行き、もう一度顔を冷水でザッと洗ってと

りあえず気持ちを切り替えると、スポーツバッグを肩にかけ家を出た。しかし母親が「柊兵、お弁当忘れてるわよ！」と玄関で叫んでいるので慌てて一度家に戻る。
何やってんだ、俺。相当動揺している。
まさかあんたがお弁当を忘れて行こうとするなんてねぇ、と驚く声を無視し、再び外へと出た。
駅に向かって歩きながら、たった今宣告されたあの予言が今日こそ外れろ、と強く強く祈る。

……実は最近の俺は恋愛絡みで憂鬱なことがある。
だからこそ、本来の自分なら真っ先に情報遮断にいきそうなあんな恋愛占いに耳を傾けるようになったのだ。
そして飯を食いながらなんとはなしに耳に入ってくる天秤座の恋愛占い内容に、
（……おい、もしかしてこの占い、ある意味当たってるんじゃねぇか？）
と俺が気付き出してまだ八日目だが、現在までこの占いの的中率はほぼ百％だ。
怖い。怖すぎる。
なぜなら運命のＢＧＭが流れ、あのおたふく野郎が
「今日は異性とあまり進展がないかも……しくしく、ぐっすん」
と予言した時は俺を悩ますあの二名の元凶共は確かに側に来なかったし、
また、今朝のように、
「ウフッ、いいことがあるかもよ～ん♪」
とあのおたふくが激しく妙な踊りをかました時は筆舌に尽くしが

たい凄まじい攻撃を喰らっている。しかも今朝の予言は恐ろしいことに、≪仲間の協力でさらに新しい展開が！？≫などとまでのたまいだしていた。

仲間……？

まさかあいつら、俺を売る気じゃねぇだろうな！？

一抹の不安が胸をよぎる。

とにかく最近のあいつらは少し態度がおかしい。

……いや待て。むやみやたらに仲間を疑うのは良くねぇな。

とにかくあの二名の元凶のせいで最近の俺はこんな風に疑心暗鬼の塊と化してしまっている状態だ。

つい最近まで現在の生活に特に不満は無かった。

勉強は面倒だが、学校はまぁ面白いし、それに学内でつるんでいる悪友もいる。家にも特に問題があるわけでもなく、父親、母親、小学五年の弟一人、という一家四人のありきたりの家族構成だ。

しかし極たまにだが、ふとそんな毎日の日々が退屈で空虚なものに感じ、自問自答することがある。いや、あった、というべきか。

――　俺は毎日こうして無味乾燥な日々をただ繰り返し続けていていいのか？　と。

しかしそれで良かったのだ。

病に倒れてから初めて健康の有り難味を強く実感するように、波乱万丈な現在の日々の中に放り込まれて以来、今は安泰で平穏だったあの頃の日々が恋しく、ただただ懐かしい。凪いでいる海の良さが分からなかったのだ。後悔しても後の祭り。

それに引き換え、今の状態は例えるなら大しけで荒れ狂う海の中にポツンと取り残され、たちまち渦の中に巻き込まれようとしている一枚の枯葉。（すでにボロボロ）

あるいは大波に翻弄され、今にも深い海底に沈みそうな難破ボー

ト船。救助信号《S・O・S》に応えてくれる奴もいない。それどころか逆にオールを取り上げられている始末。漕げねぇじゃんかよ。

そんな孤立無援の哀れな一艘の難破ボート。それが現在の俺だ。

九月半ばの旋風が電柱脇に溜まった気の早い枯葉を巻き上げる。

スポーツバッグを右肩にかけ、スラックスのポケットに両手を突っ込んで背を丸めてひたすらに歩く。長身のせいで前かがみで歩く癖がなかなか治らねぇ。

遠くに銀杏高校が見えてきた。

……今の俺の願いはただ一つ。

あの恐怖の占いが今日こそ、今日こそ外れること――。

プロローグ　ー　ここから受難は始まった　ー　＜3＞

「せぇーのっ！！」

下を見て歩いていた為、不覚にも反応が一瞬遅れちまった。両手をポケットに突っ込んでいたのも敗因だ。

後ろから聞こえたその声にギクリとしながら振り返ろう……としたが間に合わなかった。

一気に背中に感じたのはズシリと少々重い感触。だが妙に柔らかい感触が背中に当たる。

「おっはよ――っ！　柊兵！」

「美月ッ！？」

背中にしがみついているある一人の女を見た俺は後ろに向かってそう叫ぶ。

白い歯を見せニッコリと笑い、俺の背中に子泣き爺いのように取り憑いたのは風間美月（かざまみつき）。

スポーツ好きなせいで少し日に焼けた肌と、背中の中心までの長く麗しい黒髪、そして抜群のキュートな笑顔が最大の魅力（本人談）の、天真爛漫といえば聞こえがいいが、有り体に言っちまうととにかくうるせぇ女だ。

「なっ、何してんだよ、お前は！！」

と叫びながら後ろを向いたせいで前方の防衛面がついおろそかになった。重ね重ね不覚。

今度はすかさず俺の胸に目掛けてトンッと何かがぶつかってきた。

感じる軽い激突感。こちらの感触も同じように柔らかい。

「おはよ、柊ちゃんっ」

「れ、怜亜ッ……！？」

今度は真下に向かって叫ぶ。

勝手に胸の中に飛び込み、はにかみながら俺を見上げている女は森口怜亜（もりぐちれあ）。

透き通るような白い肌に黒目がちの大きな瞳、そして薄茶のショートボブが一際可憐で愛くるしい（美月談）、華奢な女。美月に比べると少々控えめな性格だ。

後ろに一人、前にも一人。

二人の美少女（繰り返すが美月談）に抱きつかれ、場所でいうなら三色サンドイッチのど真ん中、頼りない薄っぺらな合成添加物たっぷりのロースハムの位置に置かれた俺は、通りの向こうにまで突き抜けるような大声で咆哮する。

「お前らぁっ！　俺から離れろぉぉぉ――――――ッ！！」

「へ？　なんで？」

俺の腹の底からの絶叫に背中の美月はケロッとしているが、怜亜はほんの少しだけ驚いたようだ。小さな口に手を当ててキョトンと俺の顔を見ている。なぁ、頼むから俺の真下でそんな顔すんな。

「お、お前らな、いい加減にしろよ！　この間転校してきたかと思ったら俺にベタベタしやがって！」

「いいじゃん、あたし達、白樺（しらかば）小時代のかつての同級生なんだからさ。チクワの友ってやつよ」

「竹馬でしょ、美月」

美月の言い間違いを優しく怜亜が訂正するがそれも激しくどうでもいいことだ。

くそっ、それよりもこの、この前後の柔らかい感触……ッ！　脳内水銀温度計が急激に上昇中。沸点百度は軽く超えていそうだ。
……駄目だ！！　何も考えられなくなってきやがった！！　おかげでただでさえ口が悪いのに余計に拍車がかかる。
「うるせぇっ！　チクワでも竹馬でもどっちでもいい！　たっ……、いっ、いいから俺の側に来んじゃねぇ！」

――　危ねぇ、うっかり「頼むから側に来るな」と言いそうになっちまった。こっちが下手に出てどうすんだ。

「こんな朝っぱらからそれだけ大声出せるってことはちゃんと朝御飯食べてきてるね、柊兵！」
俺の背中から飛び降りた美月は前に回り、怜亜と共に俺の正面に立つ。
「そういえば新聞の記事で読んだんだけど、十代の男の子って朝御飯食べて来ない人がとっても多いんですって。朝はちゃんと食べないと脳が活性化しないのに……。えらいわ、柊ちゃん♪」
「怜亜！　お前は俺の事を柊ちゃんって言うのも止めろ！」
「だって柊ちゃん……」
「呼ぶなっつってんだろ！」
「ちょっと柊兵！　怜亜をイジめたらあたしが許さないからね！」
ひゅっ、と空を切る音がして美月の正拳が俺の鼻先三寸の所で止まる。
「美月、お前まだやってたのか？」
殴りつける真似をされて反射的に脳内温度が下がり、逆に冷静さを取り戻せた。
「ううん、ここを引越して以来、道場にはもう通ってない。自己鍛錬のみ！！」
こいつはかつて俺と同じ道場で空手を習っていたことがある。
「その割にはいい動きしてるな」

「えーっ！　そう？　ありがとっ！」
俺に対して激怒しかけていたはずなのに、ちょいと褒めてやったらもうニコニコと笑っている。
しっかし昔から変わんねぇよな、その単純な所……。
「柊ちゃん、一緒に学校に行きましょ♪」
ほれ見ろ、こっちも全然堪えてねぇし！
また怜亜が俺の名前をちゃん付けで呼びやがったが、もう俺は叱りつける気力を完全に削がれていた。返答する間も与えられず、即座に両腕にこいつらの腕が絡みつき、ずっしりとGがかかる。
「ではでは、れっつごー！」
能天気な美月の声が気分をさらに落ち込ませる。
覆面パト内に連行される犯人の心境はこういう心境なのだろうか……。

――　クラスを見渡せば何人かは必ずいるはずだ。
“　男の中にいればまったく平気なのに、女の前だと途端にグダグダになる奴　”　、俺はまさにこのタイプだ。
……って自分で言ってて情けねぇな。
仲間の一人によく言われているのだが、それでも“　女　”が【　嫌い　】　のカテゴリーに入っていない所がミソなんだそうだ。ほっとけ。
でもその指摘は確かに当たっているのかもしれない。女は嫌いでは無く、あくまで苦手な存在だ。周囲の奴らには硬派と思われているらしいが、別に硬派を気取っているわけではない。緊張のあまり、

単純に女と何を話していいのか分からなくなるだけだ。
だから仲間とつるんでいる時は、極たまにだが冗談も言い、時には突っ込まれ、口下手なりに口数も増えるのだが、自分から女に話しかけることは一切無い。
逆に女から話しかけられると、≪直径十センチ級の特大正露丸≫を思いっ切り噛み潰したようなしかめっ面になっちまう。

女の他に苦手なのはネコだ。この小動物が苦手なのも、どことなくネコは女っぽいところがあるせいだと思う。ミャア、と可愛らしく鳴かれ、澄んだ目でこっちを見上げてその何ともいえないすべすべした毛並みを身体になすりつけられでもしたら、背中にゾゾォーッと悪寒が走る。
ネコを愛でる気持ち自体はたぶん俺の根底に脈々と流れているとは思うのだが、その上に、『悪寒』『動悸』『息切れ』『眩暈』『冷や汗』、以上の断層が何層にも渡って次々に厚く覆いかぶさっているので、どうしても及び腰になってしまう。
ネコでこれだから女が側にくるとこの症状は更に増し、身体が硬直する。気つけ及び平静を保つ為に、救心一ビンの中身を全部口に放り込みたいくらいだ。

……おい、それよりも美月に怜亜。
お前らが俺を両脇から連行するのはまだ我慢する。耐えてみせる。だが、だがな！　そんなにぐいぐいと身体を押し付けないでくれ！　腕にな、お前らの片胸が時々当たってきやがるんだっての！
しかしそんな俺の内心の叫びを知ってか知らずか、美月の奴が、
「う～今日は寒いよねー！　ねー怜亜、ちゃんとあったかくしてる？　寒かったらさ、柊兵にもっとくっつけばいいよ！」
「うんっ！」
「じゃっせっかくだからあたしもーっ！」
おいおいおいおいっっ！　お前ら待てってッ！

――　だが容赦の無いWサンドイッチ攻撃再び。

頬を染めてそっと俺に擦り寄り、腕をさらに絡ませてくる怜亜。二の腕が鬱血するんじゃねぇかというぐらいの力でしがみついてくる美月。

両腕にでっけぇマシュマロをムギュッと強引に押しつけられたような柔らかい感触がまたしても俺を襲う。

……くそっ、一旦は静まった動悸がまた激しくなってきやがったじゃねぇか！

このままだと次々に襲い掛かる激しい動悸に耐えかねて、その内冗談抜きでぶっ倒れそうな気がする。そんな醜態を晒したら末代までの恥だ。マジで救心が欲しい。今なら一ビン飲み干してみせる。

あぁ畜生、そんなことよりもやっぱり今日もあのおたふく占いが当たりやがったか……。ミミ・影浦、恐るべし。

……なぁミミさんよ、俺にとってはまったく逆の意味だが、あんたの恋愛占いとやらがよく当たるのは分かった。大したもんだ。褒めてやる。

だからその占いで教えてくれ。

俺がこの生き地獄から抜け出すには一体どうしたらいいんだ！？

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7976x/

私たちに しときなさい！

2011年10月22日02時23分発行